

# 投稿論文

論 文

## 「かわいい女の子」はいかにして可能か

——保育士と子どもとの相互行為分析——

三橋 弘次 マシュー・バーデルスキー

### 要 旨

「かわいい」は、欧米では否定的に見られる「小ささ」「か弱さ」「幼さ」などを肯定的に消費する日本独特な感性であるといわれ、学際的な研究意義を呈している。だが、「かわいい」をテーマにした先行研究の多くは、「かわいい」と「女の子」の結びつきを不問の前提とし、「かわいい」を「女の子」言葉として扱い、若い女性による「かわいい」の乱用や「かわいい」ものへの執着を問題視する、偏った見方をしがちである。

こうした傾向に対し、本研究は、先行研究が見過ごしていた自然的な相互行為場面を観察することを通じて、「かわいい」という評価実践が規範的な行為であり、さらに、「かわいい」と「女の子」の結びつきを「自然」なものだと思わせる具体的な規範があることを明らかにし、先行研究の前提がステレオタイプに過ぎないことを経験的に示した。具体的には、少なくとも幼児保育の現場における先生と子どもたちとのやりとりの事例からは、たとえ「かわいい」が無秩序に乱用されているように見えても、それは理由の提示をともなう極めて規範的な行為であることがわかった。また、「かわいい評価規準」として、「小ささ」に加え、「女の子」も見出せた。この規範が在るため、「かわいい」と「女の子」の結びつきはあたかも「自然」であるかのように感じられてしまい、先行研究においてそれが不問の前提となってしまうことが示唆された。

本研究の結果は、限定性を呈するものの、若い女性が好き勝手に「かわいい」を乱用し、「かわいい」を消費しているといったステレオタイプに縛られることなく、「かわいい」という評価実践を記述してみせたという点で、今後の「かわいい」研究の発展にとって重要な貢献となるだろう。

**キーワード：「かわいい」、女の子、カテゴリー、規範、言語社会化、相互行為分析**

### 1. 問題の所在

近年、日本では「かわいい」ものが溢れ、あらゆるもの——自己さえも——が「かわいく」演出されて消費され、さまざまな場面で「かわいい！」というエク

スプレッションが聞かれる〔相原 2007〕、〔Kinsella 1995〕。とはいえ四方田犬彦によれば、「かわいい」は、今日のみ特徴的なものでは必ずしもなく、11世紀の『枕草子』以降、「小さなもの」「幼げなもの」を（未成熟なものとして見下す欧米的な態度とは一線を画す形で）肯定的に「賞味」する独特な日本文化の伝

統の中で生き続けてきた感性なのだという [四方田 2006:17-18、36]。

だとすれば、文化事象としてにせよ、評価言語としてにせよ、「かわいい」を研究することには意義がある。しかしながら、一部の例外を除いて、「かわいい」を研究する論者は、いずれも「かわいい」をステレオタイプ的に「女の子」（あるいは「女」「子ども」というカテゴリーと結びつけて論じがちである。例えば、1975年頃から少女たちの間で広がったとされる「かわいい」丸文字について、多角的な調査にもとづく研究を行った山根 [1989] は、その現象を単なる少女たちによる逸脱ではなく、1) 戦後、自動車やテレビの普及により、道路標識やテレビ画面でも見やすい文字ということで丸文字が社会的に広がっていた、さらに2) 日本語の楷書が縦書き用として発達してきたにもかかわらず、戦後、政府が積極的に横書き化を進めた、という2つの社会的背景があって出現し、広がったものであることを分析的に示してみせた。その一方で、これらの社会的要因は「かわいい」丸文字出現の必要条件であって、なぜそれが没個人主義的に少女たちの間で広がったのかまでは説明できないと主張し、「この世代」の少女たちが乱用する「かわいい」に隠れた意識構造から、「かわいい」丸文字の氾濫の説明を試みようとする。すなわち、「かわいい」が単に「きれい」という評価ではなく、自分より小さいもの、幼くか弱いものへの好感を示しており、少女たちは生きる術——つまり「苦勞のない生き方」——としてこの「かわいい」にこだわり、「弱く、幼く、愛らしく装」おうとしているのではないかというのである [山根 1989:227-237]。さらに、「かわいい」の氾濫は「男文化の喪失」 [山根 1989:237] を表しているのではないか、という見方さえ山根は示している。

また、1990年代に『『かわいい』言語乱用症候群』（特に若い女性がどのようなものに対しても「かわいい」を乱発しがちなこと）、『『かわいいもの』愛好症候群』（「かわいいもの」が、性別、年齢にかかわらず様々な属性の人々によって広く消費されていること）を文化論の視点からまとめた増淵 [1994] は、女性が社会進出を果たし、日本社会におけるその力が相対的に増したことで、「女性語であり、子ども語」である「かわいい」 [増淵 1994:12] が「女」「子ども」に主導される形で社会全般に広がっているという見方を示している。そこでは、「かわいい」の広がり日本語や日

本文化の貧困化を表しているかのような論じられ方さえされている [増淵 1994:第一章]。

一方で、小原 [2000、2006] のように、「かわいい」の氾濫を「若い女性の語彙の貧困さ」と決めつけた先行研究を批判し、女子大学生の「かわいい」使用に見られる今日的な「かわいい」の意味構造と、その「感性」の出現背景を明らかにしようとする社会学的研究も見られる。そこで明らかにされたのは、かつて目上から目下へと用いられる言葉だった「かわいい」が、個人の感性が重視される「個人化」された今日に至って、「精神的優位」の意味を喪失して「敬意の表現」にさえなっている、ということであった。だから、若い女性による「かわいいおばあちゃん」というかつては無礼と思われたであろう表現が、極めて肯定的に（上下関係の意図なく）使用されているのだという。

このように見てくると、先行研究の多くは、「かわいい」が若い女性によって辞書的な意味から逸脱させられて、何に対しても使用されている——つまり、乱用されている——ように見える状況を問題視（化）していることがわかる。しかし、それらの研究は、「かわいい」が実際の自然的な場面でどのように使用されているのかを明らかにすることなく、それが乱用されているかのように述べている点で——通常使用の仕方を明らかにしないまま、それが「乱用」されていると主張できるはずがないのだから——問題である。さらに、それらの研究は、「かわいい」の主な使用者としても、「かわいい」と他者から言われる対象としても「女の子」を暗に前提とし、議論を展開していながら、そうした前提の根拠を一切示していない。そのような前提がいかにか成り立つのかを丁寧に示すことがなければ、いかなる研究も、それ自体がステレオタイプなのではないかという謗りを免れることはできないだろう。「かわいい」の今日的な感性を探るために、調査対象として女子大学生を十分な検討なく選んだ小原も、この批判の対象に当然含まれよう。

他方、四方田は、「男性であれ、女性であれ、いずれか一方の事情だけを特権的に取り出して、世代論的な検証を行うことには何の意味もない」と主張している [四方田 2006:170]。この主張は、例えば山根の研究のような、ある世代の若い女性たちの中で広がった（と山根が主張する）「かわいい」丸文字を取り出して、「かわいい」を「女の子」と結びつける形で（その結びつきを検討することなく暗に前提として）当該

現象を一方向的に論じることを思慮深く弾劾したものである、と解釈できる。そして四方田は、その著書の別の箇所、「いかなる状況において、いかなる関係性のなかで『かわいい』という言葉が発語されるか」が重要だとも述べている[四方田 2006:20]。そうして、質問紙調査によって調査対象者が「かわいい」と言われた経験をした状況を調べていた。とはいえ、「評価」が日常的な相互行為における重要なコミュニケーション・プラクティスであることが以前から示されているように[例えばPomerantz 1984]、「かわいい」という評価は自然的な相互行為場面において実践され、その実践の仕方が学ばれ、繰り返し実践されているのである。この点を鑑みれば、「かわいい」が用いられるまさにその場面を観察したわけではなく、また「かわいい」と評価されたという極めて限定的な経験的状况を回想的に尋ねたに過ぎない四方田の議論も十分とまではいえないことがわかる。

本研究は、こうした四方田の不足を補いつつ、これまで誰も試みていない次の作業を行うことを目的としたい。第一に、いずれの論者も見過ごしていた自然的な相互行為場面における「かわいい」という評価の実践practice of assessmentが如何なるものなのか、を明らかにする(第3節)。先取りすれば、「かわいい」は極めて規範的な行為であることが明らかにされる。これにより、女性が好き勝手に「かわいい」という言葉を使用し氾濫させている、という類の主張がいかにステレオタイプに過ぎないかを示せるだろう。第二に、「かわいい」と「女の子」の結びつきを不問の前提としてしまうほど、その結びつきが「自然」なものだと勘違いさせている具体的な規範を明らかにする(第4節)。この試みは、「かわいい」と「女の子」の結びつきを暗に想定してしまっている諸研究に対する有効な批判となるだろう。最後に、「かわいい」と「女の子」との結びつきが規範的に可能になっていることの含意を論じたい(第5節)。

ただし、本研究にも不本意ながら限定性がある。すなわち、取り上げる自然的な相互行為場面が、幼児保育の現場に限られるのである。そこで明らかにされる「かわいい」の評価実践の知見を、そのまま全て「大人社会」に適用することは難しいだろう。しかしながら、幼児保育の現場では、言語的に未発達の子どもたちが言葉の使い方(規範)、そしてその言葉に関連した考え方や感じ方を学んでいる[Schieffelin & Ochs

1986]。このためここでは、何を「かわいい」と評価すべきなのか／できるのか——換言すれば何を「かわいい」と感じるべきなのか／できるのか——という言語的な規範が先生や友達との相互行為の中で繰り返しわかりやすく示されており、「かわいい」という評価実践を観察しやすいという利点もある。確かに、極めて限られた場面ではあるが、自然的な相互行為場面で「かわいい」という評価実践がほとんど研究されていないことを鑑みれば、こうした方法の有効性を示す最初の研究として位置づけられる本研究の意義は決して小さくない。

なお、本研究における「評価」とは、「その場に関連した出来事を主観的に精査することであり、そしてそれはその場の状況あるいはその場に関する会話における発話を通じて示されている」行為[Goodwin & Goodwin 2001:247]のことである。さらに、「規範norm」とは、「～すべき」という言い方に表されるような、人々の行為をその状況に望ましく同調させるものであるだけでなく、その行為が状況に適切なものかどうかを理解可能なものにするものでもある[Sacks 1972:339]。こうした見方をすると、状況に適切な行為は、規範によって可能になっていると考えることができる。そして本研究は、自然的な相互行為場面において実践されている「かわいい」という評価の仕方と、それを可能にしている具体的な規範を明らかにしていく。

## 2. データと方法

本研究は、首都圏に在るあおぞら保育室(仮名)で行ったビデオ撮影を中心としたフィールドワーク調査から得たデータをもとにしている。同保育室はプライベートに運営され、0歳児から約2歳の子どもたちの「つぼみ組(仮名)」と、それ以上の「はな組(同)」から成り、近隣の大学に勤める職員の家族や留学生家族の子どもたち約25人を預かっている。日本語を母語とする子どもたちと、日本語を母語としない子どもたち(主にアジア圏の子どもたち)の人数構成はちょうど半々くらいである。また、保育士は全て日本語を母語とした女性で、特に「はな組」を担当している保育士は40、50代のベテランである。基本的に全ての保育士が日本語以外の言語はできない。

あおぞら保育室での最もベーシックな一日は次の形をとっている。すなわち、8時半頃に子どもたちが続々と登室し、おのおの遊びに興じる。9時45分におやつを食べ、天気が良い場合は外にお散歩へと出かけ(途中の公園で「外遊び」をすることも多い)、天気が悪い場合は室内遊びが行われる。そして11時を過ぎると片づけが始まり、11時15分に昼食、食べ終わった子どもたちからパジャマに着替え、思い思いに室内遊びに興じる。そして12時45分から15時まで昼寝。15時に起床、着替えやトイレを済ませ、おやつを食べ、あとは親が迎えに来るまで、外遊びや室内遊びに興じる。

調査は2006年12月、ならびに2007年4月から2008年1月に、「はな組」を対象として、ほぼ月一回のペースで行われた。ビデオ撮影は、9時から12時(あるいは昼寝の時間)まで、ならびに15時から17時まで行った(1日5時間から6時間程度)。撮影方法は、非固定のビデオカメラ2台を使用し、1台はワイヤレスマイクを装着してもらった先生と子どもたちとの相互行為を、もう1台は子どもたち同士の相互行為を追った。

なお、以下で提示するデータ上の子どもの名前は全て仮名にし、各事例の始めに性別とその撮影時の年齢、日本語を母語としているか否かを示した。自然的場面を記述する仕方は会話分析の伝統でなされてきたものを応用し[Sacks et al. 1974]、子どもたちと保育士との自然的な相互行為の構造の詳細を記述する形で分析を進めた<sup>1)</sup>。

### 3. 「かわいい」の評価規準と評価実践

本節では、何を「かわいい」と評価すべきなのか/できるのかに関する規準——これを「かわいい評価規準」と呼ぼう——に着目して、「かわいい」評価実践の仕方を実際のやりとり中で明らかにしてみたい。辞書的に見ると、「かわいい」は、1)「小さいもの、弱いものなどに心引かれる気持ちをいさぐさま」、2)「物が小さくできていて、愛らしく見えるさま」、3)「無邪気で、憎めない。すれてなく、子供っぽい」、4)「かわいそうだ。ふびんである」といった意味をもつようである(『大辞泉』小学館)。四方田によれば、「かわいい」の意味の変遷の中で、第四のような否定的な意味は小ささ、弱さを肯定するものによって変わっており、今

日の日常語ではそのような意味で用いられることはほとんどないという[四方田 2006:33-36]。ただし、自然的な相互行為場面において、このような辞書的な意味で「かわいい」が用いられているとは限らない。自然的な場面では、どのように「かわいい」評価が実践され、何を「かわいい」と評価すべき/できるとされているのだろうか。あるいは、そうした規準はなく、「かわいい」が何に対しても無秩序に使用されて——乱用されて——いるのだろうか。

まず、最も基本的な情報として、幼児保育の現場という自然的な相互行為場面では、「かわいい」という評価の実践が頻繁に観察された[Clancy 1999も参照のこと]。具体的には、データ収集を行った全ての日で、「かわいい」が観察されないときはなかったうえに、一度ではなく、全ての日で複数回、何度となく観察された。だからと言って、無差別に「かわいい」が乱用されていたわけではない。事例(1)は、幼児保育の現場で見られた、「かわいい」という評価の実践がなされた典型的な会話シーケンスである。以下は、外遊びの最中、先生が庭に植えてあるナスを指差して子どもの注意を引きつけたところからである。

#### (1)2007/6/29、先生、ズベリ [男、2;8、日本語非母語]

((ズベリにナスを見るように指差しながら))

- 1 先生: ズベリ、ナスできてる、ほら: :
- 2 ナス: :、見てきて、ほら: :
- 3 大きくなったね、ほら: :
- 4 もうちょっと大きくなんのかな
- 5 こ[れ]
- 6 ズベリ: [ナス ((ナスを触りながら))]
- 7 先生: そ: :ナス
- 8 →これはちっちゃいの、ほら: :
- 9 ズベリ: ( )ナス ( )
- 10 先生: →かわいいね: : : : :

恐らく、何に対しても「かわいい」を乱用する「女」「子ども」を(ステレオタイプにもとづいて)批判する山根や増淵のような論者は、これを「かわいい」の乱用、日本語の貧困化の好例として見るのかもしれない。というのも、ここでは、一般的にあまり「かわいい」ものとは考えられていない野菜のナスが「かわいい」と評価されているのである。

しかしながら、先生は、無秩序に「ナスがかわいい」

という評価をしているわけではない点に注意すべきである。「ちっちゃい」という理由（「かわいい評価規準」）を明確に子どもに示しながら（8行目）、「かわいい」と評価している（10行目）。このように、先生と子どもとのやりとりの他の事例でも、先生が子どもに対して理由（どの「かわいい評価規準」を用いているか）を示しながらあるモノや行動を「かわいい」と評価したり、「かわいい」と評価してから理由を述べたりすることが頻繁に観察された。換言すれば、「かわいい評価規準」を示しながら「かわいい」という評価がなされる、という「かわいい」評価の「適切な」仕方（の一つ）が、子どもに対して先生によって示されていたといえよう。「かわいい」という評価の実践が、極めて規範的な行為であることがここでわかるだろう。

また、上記事例では、「小ささ」が「かわいい評価規準」として示されていた。実際、少なくとも収集した事例データでは、「小ささ」は最もわかりやすく示されていた「かわいい評価規準」であった。さらに上記事例からは、小さいものならば、どのようなものでも——たとえナスでも——「かわいい」と評価される可能性を呈していることもわかる。加えて、「かわいい」と呼ばれたナスはあくまでも周りのナスと比較して小さかっただけであることから、「かわいい評価規準」の「小ささ」はどうやら相対的なものようである。

これらのことについて、事例(2)で確かめてみよう。この事例は、室内遊びの最中、ヒナが先生と車のおもちゃで遊んでいるワタルに近づき、両腕でワタルを抱くような仕草をしたときのものである。なお、先生はワタルが2歳2ヶ月で、ヒナが3歳であることを知っている。そして、幼児保育の現場では、子どもの年齢が1ヶ月の違いであっても、大きな違いがあるとみなされる傾向がある。

(2)2007/5/17、先生、ヒナ [女、3;0、日本語母語]、  
ワタル [男、2;2、日本語母語]

- 1 ヒナ： ((写真のようにワタルを抱こうとする)) (0.7)
- 2 先生： ほら、ワタルくん、ほら ((先生がおもちゃをワタルに見せる))
- 3 →かわいい：：？ ((ヒナに対してワタルについて))
- 4 (0.3)

5 →ヒナちゃん和一歳違うもんね：：



「図1」<sup>2)</sup>

まず1行目でヒナは、先生と遊んでいるワタルに、写真(図1)のように腕を伸ばして抱くような仕草をした。それを見た先生は「かわいい：：？」と発言している(3行目)。この発言に際して先生からヒナに一瞥があったところから、これはヒナに向けられた発言だと思われる。興味深いのは、先生はヒナに対して、例えば「ワタルを抱きたいの？」とヒナの行動を見たまま言葉にすることもできたはずなのに、「かわいい：：？」と、ヒナがワタルについて感じているのではないかと思われることをヒナの行動から読み取って言葉にしている点である。なぜ先生は、ヒナがワタルを「かわいい」と思っている、と思ったのだろうか。もちろん、先生がジェンダー規範にもとづいて、ヒナを「母親」、ワタルを「赤ちゃん」として見ているから、ヒナがワタルのことを「かわいい」と思っていると推測したのではないか、という推論も可能なものかもしれない。しかしながら、少なくともこの相互行為場面で示されている根拠にもとづく論じ方をしていくのであれば、そうした推論は読み込み過ぎという批判を逃れられない。なぜなら、先生がヒナを「母親」として、ワタルを「赤ちゃん」として見ているかどうか、この相互行為場面からだけでは推論のしようがないからである。

むしろ、「かわいい：：？」に続く会話シークエンスにその疑問に対する答えが示されているように思われる。すなわち、「かわいい：：？」に続く沈黙(4行目)——本来であれば応答があるべき箇所であり、応答の「不在」となっている位置 [Schegloff & Sacks 1973] ——の後、つまり5行目で、先生自身によって「ヒナちゃん和一歳違うもんね：：」というように応答がなされている。先生は、見た目の「小ささ」では必ずしもなく、すでに持っている年齢に関する

る個人情報を活用した「小ささ」によって、年齢では「大きい」ヒナが、「小さい」ワタルのことを「かわいい」と思っているのではないかと推測したことが見て取れるのである。このように、「小ささ」とは極めて相対的なものであり、また質的に様々な「小ささ」がありうるということがわかるだろう。

なお分析した事例で「かわいい評価規準」は、「小ささ」だけでなく、それから連想されうる（辞書でも並列されていた）「か弱さ」、「無力さ」、「親しみやすさ」などが認められた。そうした規準はモノだけでなく、行動などにも当てはめられ、「かわいい」という評価がなされていたのである<sup>3)</sup>。

ところで、「かわいい評価規準」の「小ささ」が相対的な規準であるということは、「かわいい」という評価に対する反論の余地が残されるということの意味している。次の事例(3)は、先生とカズキとの間で繰り返された、何を「かわいい」と思うかを巡ってのやりとりである。普段から冒険家ごっこが大好きなカズキだが、その日の散歩に出発直後に見つけたカタツムリを「気持ち悪い」と言って嫌がる。散歩の道中、「カタツムリ気持ち悪いって言ってたら冒険家になれない」とカズキに言う先生に対して、「ちっちゃくてかわいい」虫なら大丈夫だとカズキは反論する。次の会話はその直後からのものである。

### (3)2007/5/17、先生、カズキ [男、5;0、日本語母語]

- 1 カズキ：((ちっちゃくてかわいい虫なら)) 怖くない (じゃん)
  - 2 先生： 怖くない?
  - 3 →カタツムリだってかわいいよ：：：
  - 4 (0.8)
  - 5 →だってぜんぜん噛みついたりしないもん
- <中略>
- 6 カズキ： 気持ち悪い。
  - 7 (0.5)
  - 8 怖くないけど気持ち悪い

先生がなぜ、カズキがカタツムリを気持ち悪がったことについて、これほどこだわるのかはわからない。「男の子」は「強く」なるべき、というジェンダー規範をここで教えているのだ、という主張は少なくともこの相互行為場面では明示的な根拠を見出せないため

読み込みすぎだと思われる。いずれにせよ、ここでの先生の意図は問題ではない。むしろ注目したいのは、カズキの「かわいい評価規準」と先生の「かわいい評価規準」との交渉がここで見られるという点である。カズキの言葉からは、やはり「ちっちゃい」ものを「かわいい」と評価すべき／できるという規範が読み取れる(1行目)。先生もそれは否定していない。しかし、先生はカタツムリを「かわいい」と評価すべき／できることをカズキに示すために、「小ささ」だけでなく、「(小ささ)から派生したと考えられる」「ぜんぜん噛みついたりしない」という「か弱さ」「無力さ」を理由として提示して、「かわいい」と評価するのである(3、5行目)。それに対して、カズキは「気持ち悪い」ものは「かわいい」と評価すべきでない／できないという規範を持ち出して、カタツムリが「かわいい」ものではないと反論しているのである(6、8行目)。

繰り返しになるが、事例(1)(2)(3)で重要なのはまず、決して無秩序に「かわいい」が乱用されているわけではない点が見取れることである。それどころか「かわいい」が用いられるとき、その理由(どの「かわいい評価規準」が用いられたのか)が相互行為の参加者のいずれかにとって明確でない場合、「かわいい」と評価した側にはその評価の理由付けが求められていた。また、反論にあった場合、その評価の正当化が求められることもわかった。「女」「子ども」が好き勝手に「かわいい」を乱用しているどころか、「かわいい」は極めて秩序立った規範的な行為なのだ。日本語の貧困化という主張の根拠などどこにも見当たらない。だとすれば、山根や増淵の主張がいかにステレオタイプの見方から生じたものであったのか、もはやこれ以上論ずる必要もあるまい。

また、具体的な「かわいい評価規準」として「小ささ」ならびにそれと関連したものが際立って観察された。そして、「かわいい」はモノや行動に内在的に備わった評価ではなく、むしろ、規範的な理由として「小ささ」をモノや行動の中に見出しうるかどうか(言及して可視化できるかどうか)による評価であることがわかった<sup>4)</sup>。

## 4. 「かわいい女の子」を可能にする規範

前節では、「かわいい」という評価実践は、「小ささ」



このように、「女の子」は、「かわいい」という評価実践を可能にする「かわいい評価規準」を構成する要素の一つであることがわかった。一方、なぜ辞書にはない「女の子」がそれだけで「かわいい評価規準」の一部になっているのかは、少なくとも本研究の事例分析ではわからなかった。だが、この疑問はそれほど重要ではない。むしろ重要なのは、「かわいい女の子」が規範的に可能になっている、という点が確かめられたことである。こうした規準があるからこそ、それにもとづいた日々の実践の繰り返しによって「かわいい」と「女の子」の結びつきが「自然」化されてしまうため、先行研究はそうした結びつきを不問の前提であるかのように思ってしまったのではないだろうか。このことの含意については、次節で詳細を論じよう。

## 5. 「かわいい女の子」を可能にする規準が含意すること

本節では、「かわいい女の子」が規範的に可能になっていることが含意することを考えてみたい。

第一に、「かわいい女の子」が規範的に可能になっているということは、「女の子」はそれ以外の理由を要さずに「かわいい」と評価できてしまうカテゴリーだということを意味している。このことは、「女の子」とカテゴリー化されてしまう人（以下鉤括弧なしの、女の子、とする）にとって決して好ましいものではない。なぜなら「女の子」とカテゴリー化される何ものに対してでも「かわいい」評価を実践しようということは、「かわいい」と評価されない場合、そのように評価できない何か「異常な」理由があることを意味するからである。こうして、「かわいい」と評価されないことを恐れ、女の子はいつそう「かわいい」に執着し、同時に、他者（モノを含む）の「かわいさ」に敏感になってしまう——だから女の子のほうが他者（モノを含む）の細かなところに「かわいさ」を見つけ出し、「かわいい」を頻繁に使用してしまうのではないか。さらに、自分自身もかわいくなろうと努力してしまうのではないだろうか [浅野 1996]。加えて、もしかわいくなる努力をした女の子に対して「かわいい」評価が実践されるなら、これが「かわいい女の子」という規範的な結びつき（規範的な「女の子」像）を再生産し、女の子の「かわいい」に対する執着をいつ

そう助長することにもなるだろう<sup>5)</sup>。

第二に、「かわいい女の子」が規範的に可能になっているということは、女の子は「女の子」だという以外の理由を要さずに「かわいい」と評価されうることを意味する一方で、女の子は別の「かわいい評価規準」によって同時に「かわいい」と評価される可能性も決して排除しない。つまり、「かわいい」が実際に特定の女の子に対して用いられたとき、評価の規範的な理由が明示されていなければ、単に「女の子」だから「かわいい」という意味だけでなく、他の「かわいい評価規準」である「小ささ」「か弱さ」などの規範的な意味も、同時に「かわいい女の子」の中に読み込めってしまう可能性を呈していることになる。このため、「かわいい女の子」は「小さく」「か弱い」ものだという規範的な「女の子」像が出来上がってしまう。さらに、「かわいい女の子」は「小さく」「か弱い」のだから、守られ、大切にされなければならない存在ともなりうる<sup>6)</sup>。結果として、例えば、女の子は太ることを極度に恐れてしまうようになる [浅野 1996] のかもしれない。というのも、太ることが、「小さく」「か弱い」はずである「女の子」としての存在否定につながってしまいうるからだ。一方で、大人になって「かわいい」と言われた女性が何か馬鹿にされた気がする [四方田 2006:56-62] のは、自分の意図とは無関係に、自分が大人なのに「小さく」「か弱く」思われている気がするところから生じているように思われる。

データの限定性もあり、いずれも仮説の域を出ないかもしれないものの、このように考えると、「かわいい」はむしろ「女の子」を作り上げていることがわかる。山根や増淵のような論者は、「かわいい」を「女の子」言葉として扱い、彼女たちの「かわいい」の乱用や「かわいい」への執着を日本語や日本文化の貧困化としてみなした。だが、実際には、「女の子」を「かわいい」に執着させる規範的な仕組みがあるのであり、この点を看過すれば、「かわいい」研究のいずれもステレオタイプの誇りを免れないであろう。

## 6. おわりに

以上、幼児保育の自然的な相互行為場面を観察することを通じて、「かわいい」という評価実践が規範的な行為であり、さらに「かわいい」と「女の子」の結



びつきを「自然」なものだと思わせる具体的な規範があることを確かめてきた。少なくとも幼児保育の現場における先生と子どもたちとのやりとりの事例からは、「かわいい」は無秩序に乱用されているのではなく、規範的な理由の提示をとまなう極めて規範的な行為であることが見て取れた。また、「かわいい評価規準」として、「小ささ」に加え、「女の子」も見出せた。この規範が在るため、「かわいい」と「女の子」の結びつきがあたかも「自然」であるかのように感じられるのである。

もちろん、「かわいい」という評価実践が規範的な行為であることがこれほど明確に観察できたのは、幼児保育の事例だからかもしれない。実際、幼児保育の現場では、様々な規範がわかりやすく教えられている。だが、「かわいい評価規準」の中に「女の子」が含まれているということが、幼児保育の現場に限られる、と考えるのは不自然だろう。というのも、幼児保育の現場と一般社会が隔絶しているわけではないからだ。だとすれば、本研究の知見は、「かわいい」と「女の子」との結びつきを不問の前提としてきた既存研究への批判には十分なる。若い女性が好き勝手に「かわいい」を乱用し、「かわいい」を消費しているというのは、ステレオタイプに過ぎない。事例の限定性があるとはいえ、これらのことを経験的データによって示したことの意義は大きいだろう。もちろん、幼児保育の現場で得た知見の全てを「大人世界」に適用してしまうのは、危険である。若い女性と「かわいい」のステレオタイプの結びつきをさらに解きほぐすためには、「大人世界」の自然的な相互行為状況における「かわいい」評価実践の研究は欠かせないだろう。今後の課題である。

#### 〈付記〉

本研究は、データ収集およびトランスクリプト化を三橋、バーゲルスキーが共同で行い、論文化は三橋が単独で行ったものである。データは、科学研究費補助金（基盤研究A「ヒューマンケアにおける相互行為の社会的分析に基づく支援システムの研究」平成19年度～22年度、代表者：埼玉大学教授・山崎敬一）に関連してなされたフィールドワークで得た。調査にご協力いただいた保育室の先生方、子どもたちとご両親に感謝を申し上げたい。

#### 〈注〉

- 1) トランスクリプトでの使用記号については、以下のとおり：

[	2人以上の話者の発音の重なり
word	発音の伸ばし
° word°	言葉の発音が通常より小さいとき
word	言葉の発音が通常より大きいとき
((bows))	非言語行動やその他のコメント
(1.0)	沈黙の長さ (0.2秒以上、0.2秒以下は「.」を使用)
(.)	0.2秒以下の沈黙
<	急な話し出し
。 / ?	。は下降調、?が上昇調のイントネーション
(word)	聞き取り不可能、あるいは不確実な部分
=	発話と発話が途切れなくつながっている部分

- 2) 写真の右側の子どもは、先生に付けてあったワイヤレスマイクで遊んでいるのである。したがって、ヒナがワタルを抱こうとする仕草について、この子どもの真似ではないか、という推論は成り立たない。
- 3) キャラクター（例えばミッキーマウスなどのディズニーキャラクターやアンパンマンなど）は頻繁に「かわいい」と評価されていた。そこでは、「小さい」から「かわいい」という理由が明示されず、「ミッキー、かわいい！」となっていた。それはそれで「かわいい」というのである。このように理由を示さずとも「かわいい」が用いられるケースも見られたが、基本的には丸みを帯びて親しみやすさを表すように作られたこうしたキャラクターたちは、そもそも「かわいい評価規準」の知識をもつ大人が作り出したものであり、「かわいい」と評価されることが自明なのである。だから、例えば、本来は怖いワニでさえ、キャラクター化されると無害で親しみやすい「かわいいワニさん！」となるわけである [2007/5/17事例]。
- 4) 四方田も次のように言っている：  
「かわいい」という観念を抜きにして間近にヌイグルミを眺めてみれば、人はそれがいかに畸形でグロテスクな容姿をしているかは了然としている。デフォルメされた表情をもち、単純な原色に塗り分けられた犬や熊の似姿が「かわいい」と感じられるのは、それが本質的に「かわいい」からではなく、人間がそれに「かわいさ」を投影する

からに他ならない。美は人をして畏敬と距離化へと導くが、グロテスクは同情を喚起する。「かわいい」とはものに宿る本質などではなく、「かわいい」と名付け、指さす行為なのではないかという解釈がここから生じる。[四方田 2006:87]

- 5) もちろん、「男の子」カテゴリーが対照的に「かっこいい」ものとして再生産されることになる。だから、「男の子」も「かっこいい」と評価されないことを恐れうる。しかしながら、「男の子」の場合、「かっこいい」だけでなく、例えば「頭がいい」など選択しうる自己像は相対的に多様で、規範的な幅があるため、「女の子」がかわくなる努力をするほどには、かっこよくなる努力をする必要がないと推測できる。
- 6) 四方田は、例えば赤ちゃんを取り上げて、それは無条件に「かわいい」存在では決してなく、「煩いし、臭く、「『かわいい』が保証してくれるはずの清潔さ、心地よさ、心理的安堵感とはまったく異質のものがそこには横たわっている」[四方田 2006:85-86] と言い、さらに「母親が現実の排泄物と悲鳴にもかかわらず赤ん坊を育て上げることができるのであれば、それはこの『かわいい』観念に支配されているからである」[四方田 2006:88] とまで主張している。このように、四方田は徹底的に「かわいい」を物事の本質に見ることを拒否し、それを儀礼的な行為とみなす。さらに、四方田の赤ちゃんに関する論述からは、「赤ちゃん=かわいい」は単なる評価に留まらず、そのように「かわいい」と評価されたものについて、それは小さく、弱いため、守り、傷つけてはならないという規範があることが示唆されている。

#### 〈参考文献〉

- 相原博之 2007 『キャラ化するニッポン』講談社現代新書
- 浅野千恵 1996 『女はなぜやせようとするのか——摂食障害とジェンダー』勁草書房
- Clancy, Patricia M. 1999 “The Socialization of Affect in Japanese Mother-Child Conversation”, *Journal of Pragmatics*, 31: 1397-1421
- Goodwin, Marjorie H. & Charles Goodwin 2001 “Emotion within Situated Activity”, Alessandro Duranti ed. *Linguistic Anthropology: A Reader*, Blackwell: 239-257

Kinsella, Sharon 1995 “Cuties in Japan”, Lise Skov & Brian Moeran eds. *Women, Media and Consumption in Japan*, Curzon & Hawaii University Press: 220-254

小原一馬 2000 「かわいいおばあちゃん——女子大生の『かわいい』の語法に見られる、ライフコース最終期に関する社会の葛藤する価値観の止揚」『教育・社会・文化：研究紀要』7：25-43

小原一馬 2006 「『かわいいおばあちゃん』」稲垣恭子編『子ども・学校・社会——教育と文化の社会学』世界思想社：154-191

増淵宗一 1994 『かわいい症候群』日本放送出版協会

Pomerantz, Anita 1984 “Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes”, John Heritage and J. Maxwell Atkinson eds. *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge University Press: 57-101

Sacks, Harvey 1972 “On the Analyzability of Stories by Children”, John Gumperz and Dell Hymes eds. *Directions in Sociolinguistics*, Holt, Rinehart and Winston: 325-345

Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff & Gail Jefferson 1974 “A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation”, *Language*, 50: 696-735

Schegloff, Emmanuel & Harvey Sacks 1973 “Opening Up Closings”, *Semiotica*, 8: 289-327. (北澤裕・西阪仰訳 1995 「会話はどのように終了されるのか」『日常性の解剖学』マルジュ社：175-241)

Schieffelin, Bambi B. & Elinor Ochs 1986 “Language Socialization”, *Annual Review of Anthropology*, 15: 163-246

四方田犬彦 2006 『「かわいい」論』ちくま新書

山根一眞 1989 『変体少女文字の研究』講談社文庫

(みつはし・こうじ 日本赤十字看護大学兼任講師)  
(Matthew Burdelski Lecturer at California State University-Long Beach)